

**Contents** \*\*\*\*\*

特集：大統領ランキングから見る米国政治	1p
<最近の Cook Political Report から>	
”Trump’s Transactional Voters” 「取引的トランプ支持者たち」	7p
<From the Editor> もう 1 か月、まだ 1 か月？	8p

\*\*\*\*\*

**特集：大統領ランキングから見る米国政治**

トランプ政権の発足からちょうど 5 週間。あいかわらず眼の前の情報に追われる日々が続いておりますが、この辺で少し長い視点で捉えてみてはどうかと思います。

米国の歴史は短いようで意外と長い。そして歴代の大統領を語ることが、そのまま米国史を論じることになる。そこで歴代 43 人の「大統領ランキング」を手掛かりに、いまの米国政治を位置付けてみることを思いつきました。過去と比較してみると、トランプ大統領はけっして特殊な存在ではない、と感じられるのが面白いところです。

**●歴史家が判定する「偉大な大統領」**

2月の第3月曜日（今年には2月20日）は、米国では”Presidents Day”と呼ばれる祝日である。もともとは初代ジョージ・ワシントン大統領の誕生日、2月22日に由来している。加えて16代エイブラハム・リンカーン大統領も2月12日なので、2月は「偉大な大統領を振り返る」のに適した時期と言えそうである。

このタイミングで発表されたのが、米 C-SPAN テレビによる「第3回 大統領歴史家調査」 (Presidential Historians Survey 2017) である<sup>1</sup>。国の発足と同時に大統領制が始まった米国においては、歴代の大統領を振り返ることが、そのまま米国の歴史をひも解くことになる。ゆえに歴代大統領ランキングも多数、行われている。ただしこの調査は人気投票などではなく、「説得力」「危機管理」「経済政策」など10の指標から、91人の歴史家が格付けを行ったというフォーマルなものである。

<sup>1</sup> <https://www.c-span.org/presidentsurvey2017/>

○偉大な大統領ランキング (C-SPAN)

	President's Name	Order	Party	Score	2017	2009	2000
1	Abraham Lincoln	16	Republican	906	1	1	1
2	George Washington	1	No Party	867	2	2	3
3	Franklin D. Roosevelt	32	Democrat	854	3	3	2
4	Theodore Roosevelt	26	Republican	807	4	4	4
5	Dwight D. Eisenhower	34	Republican	744	5	8	9
6	Harry S. Truman	33	Democrat	737	6	5	5
7	Thomas Jefferson	3	Dem/Rep	727	7	7	7
8	John F. Kennedy	35	Democrat	722	8	6	8
9	Ronald Reagan	40	Republican	691	9	10	11
10	Lyndon Baines Johnson	36	Democrat	686	10	11	10
11	Woodrow Wilson	28	Democrat	683	11	9	6
12	Barack Obama	44	Democrat	668	12	NA	NA
13	James Monroe	5	Dem/Rep	645	13	14	14
14	James K. Polk	11	Democrat	637	14	12	12
15	Bill Clinton	42	Democrat	633	15	15	21
16	William McKinley Jr.	25	Republican	626	16	16	15
17	James Madison	4	Dem/Rep	610	17	20	18
18	Andrew Jackson	7	Democrat	609	18	13	13
19	John Adams	2	federalist	603	19	17	16
20	George H. W. Bush	41	Republican	596	20	18	20
21	John Quincy Adams	6	Dem/Rep	589	21	19	19
22	Ulysses S. Grant	18	Republican	556	22	23	33
23	Grover Cleveland	22/24	Democrat	540	23	21	17
24	William H. Taft	27	Republican	528	24	24	24
25	Gerald R. Ford Jr.	38	Republican	509	25	22	23
26	Jimmy Carter	39	Democrat	506	26	25	22
27	Calvin Coolidge	30	Republican	505	27	26	27
28	Richard M. Nixon	37	Republican	486	28	27	25
29	James A. Garfield	20	Republican	481	29	28	29
30	Benjamin Harrison	23	Republican	461	30	30	31
31	Zachary Taylor	12	Whig	458	31	29	28
32	Rutherford B. Hayes	19	Republican	458	32	33	26
33	George W. Bush	43	Republican	455	33	36	NA
34	Martin Van Buren	6	Democrat	450	34	31	30
35	Chester Arthur	21	Republican	446	35	32	32
36	Herbert Hoover	31	Republican	416	36	34	34
37	Millard Fillmore	13	Whig	393	37	37	35
38	William Henry Harrison	9	Whig	383	38	39	37
39	John Tyler	10	Whig	372	39	35	36
40	Warren G. Harding	29	Republican	360	40	38	38
41	Franklin Pierce	14	Democrat	315	41	40	39
42	Andrew Johnson	17	Republican	275	42	41	40
43	James Buchanan	15	Democrat	245	43	42	41

合計 44 代 (43 人) のランキングには、数年後にはトランプ大統領 (45 代) も確実に加わることになる<sup>2</sup>。果たしてどんな位置づけになるのだろうか。

その前に、以下はこのランキングを見た筆者の個人的感想である。

- \* リンカーン (16 代) の偉大さは圧倒的。南北戦争を勝ち抜き、国家の分裂を防いだ功績はまことに大なるも、それは前後のピアス (14 代)、ブキャナン (15 代)、ジャクソン (17 代) らの低評価と対照的である。つまり相対的な評価ということになる。
- \* ワシントン (初代) と両ルーズベルト (26 代、32 代) が上位を占めるのは定番だが、ジェファーソン (7 代) は近年、人種差別主義者という評価が加わって低下気味。ウィルソン (28 代) やジャクソン (7 代) にも同様な傾向あり。逆にアイゼンハワー (34 代) は 5 位へと急上昇。歴史的評価は、時代の価値観とともに変動するようだ。
- \* 共和党と民主党の分布はほぼ半々であり、二大政党による有意な差は見られない。ただし 19 世紀のホイッグ党は揃って成績が悪い。また、3 代から 6 代までの民主共和党 (Democratic-Republican Party) は、今日の民主党とは別物と考えるべきだろう。

## ●偉大な 20 世紀から、偉大ならざる 21 世紀へ

何はさておき、今回初めてリストに入った第 44 代オバマ大統領を取り上げてみよう。なんと歴代 12 位という高い評価を受けている。本誌 1 月 27 日号「オバマ時代の米国経済を回顧する」において、辛口な評価をした筆者としてはやや心外である。

項目別にみると、以下のような評価が行われている。③国際金融危機を乗り越え、④スキャンダルとはまったく無縁で、何より⑨黒人初の大統領になった、といった点で評価が高い。逆に⑤外交はいまひとつで、⑦議会との関係はお世辞にも褒められたものではなかった。またオバマは雄弁で名を馳せたが、①国民を説得する力においてはクリントン (9 位) や JFK (6 位)、レーガン (5 位) などの後塵を拝している。

Categories	Scores	Rankings
① Public Persuasion	77.9	10
② Crisis Leadership	65.4	15
③ Economic Management	69.6	8
④ Moral Authority	77.5	7
⑤ International Relations	55.1	24
⑥ Administrative Skills	61.3	19
⑦ Relations with Congress	37.8	39
⑧ Vision / Setting an Agenda	73.3	12
⑨ Pursued Equal Justice For All	83.2	3
⑩ Performance Within Context of Times	67.5	15

<sup>2</sup> クリーブランド大統領が 2 度務めているので、現在の第 45 代トランプ大統領は通算 44 人目となる。

それでも 12 位は、近年の大統領としては出色の成績である。ブッシュ父（20 位）～クリントン（15 位）～ブッシュ子（33 位）と続いているので、レーガン大統領（9 位）以来の高評価となる。ちなみにクリントンとブッシュ子は、辞めた直後の調査よりも順位が少しだけ上昇した。客観的な評価には、確かにある程度の時間を置いた方が良いのだろう。

ところでそれ以前には、32 代の FDR からトルーマン、アイク、JFK、LBJ まで 5 人の大統領が連続してトップテン入りしている。米国が世界の覇権国となった 20 世紀中盤には、大統領も偉大な人物が続いていたことになる。それもそのはずで、彼らは第 2 次世界大戦や対ソ冷戦を戦っていた。その重圧は、今とは比較にならなかったはずである。

逆にレーガン政権下で冷戦が終結して以降は、大統領も小粒になった、あるいは小粒でも務まるようになったとの感がある。全世界に対し、米国がそこまで責任を負わなくてよくなったことも手伝っているであろう。そしてとうとう 2017 年には、「アメリカ・ファースト」を標榜する大統領が誕生したわけである。

考えてみれば、現在のトランプ大統領に対する不安感が、去ったばかりのオバマ大統領の評価を高めている可能性がある。仮にトランプが後世で高い評価を得るようになれば、その分だけオバマのランキングは将来的に下がることになるだろう。評価はあくまでも相対的なものだからだ。

とはいえ、それはかなり想像しにくい事態ではある。むしろ本誌の前号「ドナルド・トランプ政権研究序説」で指摘したように、第 29 代ハーディング大統領（40 位！）に近い評価で終わると見る方が自然かもしれない。余計なことながら、ハーディングの前のウッドロー・ウィルソン（民主党の理想主義者で、2 期 8 年を務めた）は、オバマより 1 つ上の 11 位にランクされている。20 世紀のウィルソン&ハーディングと、21 世紀のオバマ&トランプはつくづく相似形のように映るのである。

偉大な大統領が必要とされていた 20 世紀とは違い、21 世紀は選ぶ側も選ばれる側もそこまで深刻にならなくてもよくなった。米国がまだ「新大陸国家」であり、内向きであることが許されていた 19 世紀においても、本当の意味で国難に対峙したリンカーン以外は惨憺たる評価の大統領が並んでいる。「最近、偉大な大統領が出なくなった」ことは、そんなに嘆くべきではないと達観することもできるだろう。

## ●アイゼンハワー「中道政治」への再評価

今回のランキングで、筆者が一番驚いたのはアイゼンハワー大統領の 5 位である。2000 年調査では 9 位であったから、近年になって評価が上昇していることが窺える。

アイゼンハワーは第 2 次世界大戦の英雄で、「政治経験まったくなし」であったにもかかわらず、当時は万年野党だった共和党の「勝てる候補」として担ぎ出された。大統領選には大差で勝利し、1953 年から 2 期 8 年にわたって大統領職を務めている。

とはいえ、目立った業績を残したとは言い難い。内政では特に見るべきものはなく、外政ではむしろダレス国務長官の印象が強い。国民的な人気を誇り、“I like Ike.”（アイクが好きだ）というキャッチフレーズが受けたことと、退任演説で「軍産複合体」の存在を指摘したことがかろうじて記憶に残る程度である。

そのアイクへの評価がなぜ今になって上昇しているのか。これを説明する格好な書籍が、2015年に出版された『分極化するアメリカとその起源』（西川賢／千倉書房）である。今日の米国政治の分裂、特に共和党保守化の起源を、1950年代から60年代（アイゼンハワー政権からその後）に求めた研究である。

もともと支持政党すら曖昧であったアイゼンハワーは、大統領になってからは財政、労働、農業、公民権など多くの分野で8年間にわたって「中道路線」を継続する。だが、そのことは党の理念に反するものとして、共和党保守派の反発を招くこととなる。結局、与党を大統領の流儀に染めることはできず、中道路線の「後継者」として1960年選挙に出馬したニクソン副大統領も、僅差でケネディに敗北してしまう。

その後、共和党内では穏健派と保守派の対立がエスカレートする。1964年の共和党予備選挙は両者の「天王山」となり、超保守派のゴールドウォーター上院議員が勝利する（本選では惨敗）。党内穏健派は弱体化し、続く68年選挙を制したのは「保守化」したニクソンであった。さらに1980年のレーガン勝利以降は、共和党内における保守派優位が決定的になる。つまり共和党の保守化は、1950年代に起源があったというのである。

「大統領による中道政治の成功が、党内の反発を招いて反主流派の台頭を招く」という構図は、少し遅れて民主党側でも生じている。これまた西川賢津田塾大学准教授の近著『ビル・クリントン』（中公新書）では、クリントン政権の中道路線（財政均衡、福祉改革、NAFTAやWTOなど）が、党内左派から「悪しき妥協の産物」と見なされ、その後における民主党の左旋回をもたらしたことが描かれている。

共和党の保守化と民主党のリベラル化は、ともに「与党時代の中道政治の成功」が原因だった、という指摘は興味深い。このようにして二大政党が「妥協なき政治」に走った結果、米国政治の分極化は抜き差しならないところまで来てしまった。2008年に「ひとつのアメリカ」を標榜して当選したオバマも、政権後半では統治スタイルを変化させてリベラル化した。こうした迷走の果てに、現在のトランプ政権がある。

そんな中で、「2009年頃からアイゼンハワーが再び脚光を浴び始めた」と西川氏は指摘している。党派的な与野党対立が続き、「決められない政治」が常態化する中であって、共和党内では「もっとアイクのようになれ」、民主党側でも「ヒラリーはアイゼンハワーになれるか」といった言い方がされるようになってきているという。

今回の歴代5位という高い評価もその表れと言えるだろう。『分極化するアメリカ…』の終章は、「アイゼンハワーは『（共和党保守派との）戦争には負けたが、歴史において勝った』、とまで言っては、それは穿ち過ぎであろうか」という言葉で締められている。

## ●「ジャクソニアン」としてのトランプ政権

同じく「政治経験ゼロ」で誕生した大統領であっても、トランプにはアイゼンハワーのような柔軟性はまったく見られない<sup>3</sup>。

トランプ大統領が理想とし、ホワイトハウスの執務室に飾っているのは第7代アンドリュー・ジャクソン大統領（任期：1829-37年）の肖像画である<sup>4</sup>。軍人出身のジャクソンは、「私は嵐を呼ぶために生まれてきた。静寂など似つかわしくない」と述べたという。これまた、トランプにはピッタリな言葉ではないだろうか。

そのジャクソンは今回調査では18位である。なにしろ20ドル紙幣に使われているくらいだから、本来はもっと評価が高くていいはずである。ジャクソンは「庶民のための政治」を掲げ、白人男子のみとはいえ普通選挙制を実現した。反富裕層の立場から、第2合衆国銀行の解体を強行した。他方、先住民族たるネイティブ・アメリカンを狩猟地から追い出すことを躊躇しなかった。「アンドリュー1世」と呼ばれるほどの強権ぶりも目立った。今日的な価値観から行くと、ジャクソンは評価が右肩下がりとなるタイプである。

この「トランプ≡ジャクソン説」を、真正面から取り上げた論文が Foreign Affairs 最新号（3/4月号）に掲載されている。その名も”The Jacksonian Revolt”（ジャクソニアンの反乱）。著者は「ジャクソニアン/ハミルトニアン/ジェファーソニアン/ウィルソニアン」という米国外交の4類型を作った政治学者、ウォルター・ラッセル・ミードである。

いわく、トランプが体現するポピュリズムは、米国初のポピュリスト大統領であるジャクソンの思想と文化に根差している。トランプの熱狂的支持層は、米国は使命を帯びた特別の国などではなく、単なる国民国家だと考える。政府の役割は国民に対して、物理的な安全と経済的な福利を実現することだ。ところが政府は、悪意ある勢力に乗っ取られている（とジャクソニアンたちは懸念している）。エスタブリッシュメントはもはや愛国的ではなく、コスモポリタンの情念に捉われている。だが自分たちは民族、人種、性別、宗教といった「アイデンティティ政治」にはもうウンザリしている。トランプ支持者たちの根底には、こうしたエリートに対する不信感がある。

他方、エリートは彼らのことを、「銃や宗教にしがみつく痛い敗者たち」と見なしている。ヒラリーなどは、「嘆かわしい人たち」と呼んで非難したほどだ。しかるにこうしたポピュリストの伝統は、米国史の中に脈々と流れてきたものである。それがおそらくティーパーティー運動とともに復活し、ついには「ジャクソン」を発見したのではないか。

長年にわたる米国政治の分極化現象は、とうとう「ポピュリスト＝ジャクソニアン」の伝統を呼び覚ましてしまった。それが今日のトランプ政権だと考えると、いろんな意味で辻褃が合ってくる。同時に、「歴史に根差したこの流れは簡単には終わらない…」と覚悟しておくべきではないだろうか。

<sup>3</sup> ただし偶然にも、日本の首相と一緒にゴルフをした（＝岸&安倍）という共通点がある。

<sup>4</sup> 日経電子版 2月20日「トランプ氏の過激な政策、見逃せぬ庶民の喝采」

## <最近の The Cook Political Report から>

”Trump’s transactional Voters”

「トランプの取引的支持者たち」

by Amy Walter

February 15<sup>th</sup> 2017

\*米国政治ウォッチャーのサイトでちょっと面白いコラムを発見。世論調査はたくさん行われていますが、プロの手にかかるとこんな風に深読みすることができるのですね。

<抄訳>

トランプ大統領は取引的であって、志操堅固な人物ではない。「最良の取引」ができる男として自らを売り込み、伝統的な共和党の矩を超えてきた。そしてワシントンに乗り込み、今やすべての手続きを変えようとしている。この姿勢故に、多くの有権者を惹きつけている。ただし多くの支持者はトランプと同様に取引的だ。「米国を再び偉大な国に」という約束が果たされなければ、あっけなく大統領を見離すと示唆する分析は少なくない。

●**CBS News** : 2/8-10 に行われた 2200 人へのネット調査では、4 つの顕著なグループが浮上した。①22%は堅い支持層でトランプを見捨てない。②35%は断固拒否。残る 43%は中間で、まさしく取引的だ。③条件付き支持者 (22%) は「支持するが結果を出せ」(特に経済で) と考え、全てには賛成しないが「物事を揺さぶる点は歓迎」している。④残る 21%は現時点で反対だが、「仕事次第では再考する」「経済が良くなれば支持は広がる」。

●**Priority USA** : 民主党系のネット調査では、2012 年にオバマを支持し、16 年にはトランプに転じた 801 人の有権者に共通の傾向が見られた。彼ら「緩い」トランプ支持者は心中複雑であり、35%は「トランプはいい仕事をすると確信」している。彼らは経済的に圧迫されていると感じ、トランプの政策によって富裕層ではなく中間層が潤うことを期待している。「緩い」トランプ支持者の 58%は、生活費に比して収入が落ちたと感じている。

●**Survey Monkey** : ネット調査でトランプに「やや好意的」な 17%に追加調査を行った。彼らのうち 68%は信念を共有しており、60%は仕事に耐えうる、59%はやり遂げることができると思っている。ただし信頼感は乏しく、約束を守る能力がある 38%、効率良い管理者になる 34%、大統領として勇気づけられる 20%となっている。正直で信用できるという評価は実に 11%にとどまった。彼ら「緩い」トランプ支持者は、能力への期待値が低い。望んでいるのは「やり遂げること」であり、政権の機能不全やロシアとの癒着問題は関心外である。ただし、当初の大統領令ラッシュが審議や法案の停滞をもたらすようなら、「やり遂げる能力がある」というイメージが薄れて、支持率も低下することになるだろう。

●**NACO Study** : 2016 年に民主党から共和党に転じた「郡」は、経済的に疲弊した地域でもあった。「雇用の回復は遅く、56%は金融危機以前の水準に戻っていない。GDP も同様。こうした有権者がトランプを支えているが、果たして製造業の雇用は増えるのだろうか？

**結論** : 「緩い」トランプ支持者の経済状況を改善するのは簡単ではない。特に中間選挙まで、となると。しかも大統領が経済以外のことに時間を割くと、こうした条件付き、取引的支持者は離れていく。今の手法は好まれているが、最後は実利が必要になるだろう。



## <From the Editor> もう1か月？まだ1か月？

トランプ政権はこれで発足から5週間目。ご本人が「大人になる」ことはなく、「さすがに大統領になれば現実的になるだろう」という期待も外れ、あいかわらずの「天然ぶり」を日々発揮されています。

最初の3週間はまさに絶好調。24本もの大統領令を発出し、つまり「1日1本」以上のペースで世間を賑わせておりました。それが4週目には1本もなし。この間に「イスラム圏7カ国からの入国禁止措置」は司法に否定され、マイケル・フリン NSC 担当補佐官は辞任を余儀なくされ、閣僚人事は遅々として進まず、メディアからは「ロシアゲート」で叩かれている。「潮目が変わった」と見えるかもしれません。

気の早い向きは、早くも「弾劾手続き」や「共和党内クーデター」の可能性に言及しています。でも、それは希望的観測というものでしょう。ドナルド・トランプは確かに異端の大統領ですが、過去に遡ればあの程度の「異端」は他にもあったのです。そして支持している人たちは（transactional な支持も含めて）、ちゃんと一定数は居るのです。

ご本人は先週末、フロリダ州に出かけて選挙戦もどきの演説をやってきました。これこそ「元気の素」というべきで、政治経験もなければワシントンに足場もないトランプ御大にとっては、「選挙で勝った」ことが唯一の政治的資本。そして選挙に勝てたのは、「ワシントンに居るエリートどもには、けっして分からない『忘れられた人々』の声を自分は聞くことができる」から。

リアリティ TV 司会者として成功を重ねてきたトランプ氏には、庶民が何を言って欲しがっているかが分かる。それを口にしたら、普通の政治家だったら即座にアウトになるような際どい内容でも、政治家としての欲がないから顰蹙を覚悟で言いたい放題ができる。だからこそトランプ人気が続く。きわめてシンプルな話です。

他方、既存のメディアは、相変わらず自分たちのどこが間違っているかが分かっていない。「トランプさえ追い落とせば、昔のまともな政治が帰ってくる」「成果を挙げられなければ、トランプ人気も失速するだろう」などという勘違いをしている。コアなトランプ支持者たちは、ワシントン内で摩擦が起きているのを見て喜んでいる。ところが彼らは、これが復讐劇であることに気づいていない。それじゃ罰ゲームは終わらないでしょう。

それにしても「ジャクソニアンの反乱」とはよく言ったもので、今やホワイトハウスの記者会見場では最前列を「ブライトバード・ニュース」などのネットメディアが占め、failing@nytimes（落ち目のニューヨークタイムズ）や fake news（CNN）などの既存メディアは後列に配されているとのこと。これはもう下剋上でありますな。

来週2月28日には、大統領の議会合同演説も予定されています。ジャクソン式の「革命宣言」に近いものになるんじゃないでしょうか。まだまだぬかるみは続くと思いますぞ。



\* 次号は2017年3月10日（金）にお送りします。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com)